

大阪市廃止を許さない御堂筋パレード

昨日 10 日午前、御堂筋パレードに参加した。台風が進路が気になり、新聞・テレビの天気予報に注目した。9 日昼頃の強い雨の時には、たぶん中止かなと思ったが、大阪市廃止「反対」の願いが通じたのか、デモ出発頃には薄日が差してきた。

市役所近くの中之島に集まり、10 時から出発前集会が開かれた。大阪・市民交流会や東住吉区の住民団体など多くの団体が実行委員会をつくり、「市民大行動御堂筋パレード」が準備されてきた。大阪市廃止



「反対」をメインスローガンに、コロナ禍のなか参加者はマスクを着用し、かけ声を出さずに御堂筋をぶらぶら歩くことになった。

久しぶりにデモに参加したのは、もちろん大阪市廃止「反対」を大阪市民にアピールするためだが、久しぶりに御堂筋を歩いてみたかったこともある。

御堂筋は近代大阪の骨格をつくった関一市長時代の「成果」である。宮本憲一先生の『都市政策の思想と現実』から。

関の社会資本整備は将来をみこして、スケールの大きなものであった。その代表的な例は、御堂筋と地下鉄であろう。御堂筋は梅田から難波にいたる、4km の大道である。5 車線道路で歩道がゆったりとってあり、中央の 2 つの分離



帯は銀杏並木でかざられている。この御堂筋は建物の水平線をそろえるために 100 尺 (33m) で規制をした。この規制は戦後までつづいたが、淀屋橋から本町にいたるまでは水平線がそろい、その高さが銀杏並木と調和して実に美しい。

久しぶりに御堂筋を歩いてみて、開発の波が押し寄せ、美しい景観もかなり変わってきたのがわかる。高層ビルが建てられ、淀屋橋周辺で超高層ビル建設も計画されている。水平線がそろった美しい景観は、過去のものになりつつある。それでも御堂筋は、淀屋橋から本町あたりまでは調和のとれた景観ものこっており、関市長の「大大阪」の時代に思いを馳せながら歩いた。その 131 年の歴史をもつ大阪市が、11 月 1 日に強行されようとしている住民投票により廃止されるかもしれない。なんとか阻止したい。

淀屋橋から本町、心斎橋から難波へと 700 名近くの人が歩いた。恥ずかしながら、私は途中で休憩する始末。コロナ禍で 1 日 8000 歩を歩く習慣が持続できなくなり、足腰が弱くなり、それが持病の腰痛を悪化させるという悪循環。最近は再び歩くようになり、足腰も回復してきたが、まだ本調子でないことがわかった。でも、ゴールまで歩き通したので、ほっとしている。住民投票まであと 3 週間、奮闘努力の毎日だ。

(2020 年 10 月 11 日)